

保健・体育教育（保健）

子どもの成長発達を保障する
養護教諭ならでの実践から学ぶ

種市倫江

はじめに

先の見えない経済不況の中、三月一日には東日本大震災が起こり、その後の原発事故と放射能問題が及ぼしている影響は余りにも大きく、被災地の子どもたちへの対策と復興の遅れは、経済大国と言われた日本の現実とは思えないほどの酷い状況である。その一方、子どもも手当て・公立高校授業料無償化など、子どもたちのための政策は打ち切られようとしている。災害復興をいい訳にした国の教育福祉政策の切り捨ては許しがたいものである。数年前から言われている、貧困が子どもたちに与える影響は拡大するばかりである。

国連子どもの権利委員会が出した『第三回最終所見』で

は、「子どもが直面する困難が量的にも質的にも変化してきている」とある。

量的に拡大したものの（伝統的困難×4つの指標：イジメ・不登校・校内暴力・自殺）と新しい困難（子どもが感じている「孤独感」）が出現していると言ったことであった。

人間形成そのものが危機にさらされている。家庭や学校で子どもが大人との間で享受している人間関係が貧困であるがゆえに、子どもが「寂しい」と感じている診断である。

保健室で関わる子どもたちの生きづらさは、子どもの発達要求や自己実現要求どころか生存の保障すら脅かすほどである。食事の用意がされていない、病院に行けない、学校にかかる諸経費が払えないなどが珍しいことではなくあった。親と過ごす時間があまりにも少なく親子関係を築けない子どもも多い。愛情不足の子どもたちが、養護教諭に関わりを求めて日々やって来る。子どもたちの育ち方が、精神や体の発達に影響を与えているのは明らかであろう。経済的に困難かつ多忙で余裕がない保護者の生活が、子どもに影響している実態が見えてくる。

子どもたちの育ちのひずみはそのまま、イジメ、不登校、精神的障害、自殺など、心身の健康問題を引き起こす原因になっている。格差社会がますます広がり、子どもたちの中にも格差が顕著になっている。貧困とは対極にいるよう

に見えながら、過度の受験競争に迫り立てられる子どもたちもまた多大なひずみを受けていると言えよう。

今年も保健室で見える子どもたちの発達課題や問題とその背景を、ていねいに考えていきたい。保健室から、子どもの現状を柔らかな視点で見つめ、多方面へと発信していくことで、問題解決・改善へとつなげていくことができればと考える。

リストラや過重労働、経済的悪化で余裕がない親たち。超過勤務、教員評価、免許更新制、同僚や保護者・地域とのつながり不足で疲弊する教師たち。つながり支え合う教育が崩壊しつつある今、私たちにできることは何であるかを、仲間の実践から学ぶところは非常に大きい。レポートを通してさまざまな観点から議論していきたい。

(高教組養護教員部からの提起)

一 自分の身体を理解し、主体的な生活を送るための

健康相談活動の取り組み

健康診断の事後指導を充実させて

宗合教組〇〇中学校 S〇

日本最北の島から、その地に根ざしている者でなければ絶対にできない、その地域の実情を熟知しているからこそできる、子どもを育むということの養護教諭としての原則

的な取り組みをまとめた見事な報告であった。

健康相談のねらいを「健康診断に基づく事後措置を効果的に行うためや、日常の生活習慣から心身の健康状態を見つめさせ、何が課題でどのようながらが必要かを考えさせる機会とする」とした。時間のない中でも、一人ひとりに負荷のかからない時間帯を探り、本人と折り合いをつけながら意味ある時間をつくる。この細やかな動きからであるう、中学生気質によく現れる「何で俺が」「めんどくせー」というような雰囲気は払拭されている。

相談時に活用される健康診断結果や基本的な生活習慣、悩みや相談事、今までの利用状況と欠席・遅刻・早退等から、S〇さんと共に自らを客観視していく中で、新たに覚えてくる自分に必要な事柄は、未来の輝きを願うS〇さんの思いがベースにあるからだ。

S〇さんの子どもを思う深い愛情からなる事実に基づいての指摘や守秘義務の徹底が、保護者との共通基盤をつくっている。保護者に眼鏡屋さんが島にくる日程まで知らせる、その関係性は、養護教諭としての仕事の質の高さを職場内に浸透させ、子どもを中心にすえての同僚性を生み出していく。

資料に学年通信が用意された。通信には、「〇中の母」ことS〇先生、〇〇の部屋、〇〇先生のお言葉等のコーナ

ーがあり、担任以外の教職員との協業が生み出す温かな学校の存在と、だからこそ地域へしっかりと発信していける強さを、資料から見つけることができた。

二 保健室利用の実態からの生徒理解と対応

「『貧困』がもたらす子どもの実態に学校は何ができるか？人間関係づくり教育の必要性」

高教組 函〇〇高校 T〇

「大人はどうなってしまったの？」という疑問を投げかけながら、「人間関係作り教育」の重要性と緊急性、今できることを、おだやかに示すT〇さん。

「子どもに関わるさまざまな立場の人たちが手をつなぐ」がこれからの課題であり、そのためには、この分科会を構成している者同士でもコミュニケーションスキルを体験しよう、と提起した。

4人のグループで、シェアリングタイム「保健室利用件数の推移」について話し合う。わずかに数分ではあるが、すべての参加者が発言しあう。関係性を即座につくっていくT〇さんの、各種の学習会参加と日頃の学習・その取り組みで培われた力量に目を見張る。

コミュニケーションスキルの必要性は、当然感じているが、T〇さんの思いは「貧困がもたらすもの・その連鎖・

豊かな学びの保障を」等の関連からの「絶対的コミュニケーション不足」、特に底辺校といわれる高校での実態からである。

保健室から見えることを、さまざまな立場の人たちと共有していくことは、多様な視点での方向性の発信でもある。紹介された学習会のお誘い文章には、「一人で悩まないで」と書かれていた。SOSの出せる人に、が強調された。

三 保健室登校のかかわりから

根室教組〇〇中学校 〇〇

2年前、荒れの中での保健室づくりに苦悩しながらも、日々変化していく、荒れた子どもたちのようすが報告されている。

今回は、その後、保健室から見えてきた子どものように、特に保健室登校の生徒との関わりから、いったい学校とはどんなところなのか、いま学校に求められていることは何かを、不登校をはじめとする子どもたちの成長発達をどう見るかを問う中で、1人のA男に焦点をあてながら、学校・保健室の実情が語られた。

荒れた学校で、透明さを装いながら沈黙を続け卒業した子どもたち。今その子どもたちが置き去りにされていた子

どもたちと感ずる筆者。筆者の、子どものおかれてある背景から、子どもの感情世界を敏感に感じとろうと努力する姿から、子どもたちの心の中に安心感を育みたいという願いが見える。

最も不安定な子どもたちが、進路で重圧をかけられながらも、高校に行ったら人間関係も何もかもリセットできることを願う。

学校には、一人ひとりの意志や感情を尊重してくれる大人としての教師たちが不可欠だ。その大人たちである教師たちがチームとして動くとき、学校に子どもにとつての安心感の土台が構築されていくはずだ。社会全体のテンポは大きくは変わらないが、この動きは、必ず学校と家庭が結びつき、さまざまな工夫等が生み出されていくだろう。

まずは何ができるか、この問いは、全渡島教組K〇レポート報告後に、改めて議論することにした。

四 チーム支援をめざして

全渡島教組〇〇小学校 K〇

大きな街の600人以上の中心校。朝から少年団活動があり、放課後もさまざまな活動が行われている。子どもも保護者も教師も忙しく動く毎日。会議は数々の名前が付い

た諮問機関が定着する中で、ヒザを交えゆったりと語り合える話し合いは少ない。病休者も複数抱え、支援員含めチーム支援のメンバーも短期間で替わっていく。

こんな中での保健室。年間2000余りの来室者から学年の課題を探り、頻度の多い子から学級のようすを見る。保健室を求める子どもたちから、時として担任のSOSを知ることもある。

K〇さんは現在4年目。保健室が子どもたちでいつもいっぱいという中で、今必要なチームとしての動きができるように、教育相談会の有機的機能のために情報発信を模索する。そのためには、まず情報の共通化。

そんな中から重い課題を抱えている学年が見えてきた。学級と保健室では無理である。保健室で過ごす子どもたちを全体で共通化することで、どこで誰が何をするのかの動きが出来はじめる。当然、親支援・教師支援含めての広がりと共に。保健室で過ごす子どもたちの一部保護者との面談もスタートした。

保健室にいる子どもたち。なぜ教室で安心していることが出来ないのか。この課題こそ、子どもの心を一人ひとりが解きほぐしての子ども理解という観点で、学校を改めて見直していくことだろう。

昨年の学校評価で、今求められる保健室への要望と教師

が陥りやすい養護教諭任せに対する反省等が多数上げられた。大規模校での忙しい状況の中でも、K〇さんの子どもたちを大切にしていきたいという思いと、だからこそ機能するチームをめざして、保健室から何が発信できるのかを問い続ける姿勢に今後の進展含めて学びたい。

五 支援体制をどうつくるか（テーマ討論）

孤立化が加速し、学校・家庭・地域との信頼関係や互いの依存度も消え始めた。人々の苦痛の叫びが弱者である子ども姿から見えている。

子どもは子どもの中で育つという大前提をとえながら、今何ができるかを問う時、子どもの事実・実態からのスタートに確信したい。

参加者からのさまざまな意見の根底に、子どもを中心にすすめることが共通していた。

簡単に相談できる委員会をつくり、学校としてどうしていくのかを、具体的に話し合う。その会議と平行して「子ども理解のための生徒指導部だより」を出す。子どもを中心に何ができるかは、まず親と教師がどうつながるか、ということである。一人ひとり課題は違う。（胆振M）

担任は不登校の子どもたちとの関係が、だんだん薄くな

る傾向がある。これはあきらめてしまうということ。関わり合いを作り続けることに努力する。本人と向き合うために、その子のペースにあわせることが基本であろう。（檜山〇）

まずは学年団での声かけ含めての具体的な動きをつくる。（渡島H）

あきらめない、あせらないを基本に動き出すことで、新たな何かが生まれ始めることを、参加者は実感した。

学校に存在するさまざまな会議を、いかに機能させるのか。この議論を通して、その前提は養護教諭の確かな目であらえた情報の提示である。養護教諭としてどう動くかは、学校としての指針の一つ。養護教諭のスタンスが、学校全体で納得できている、或いは納得を得ていくことにつながっている。

さまざまな課題を抱えた子どもが、子どもの中で育っていくこと（育ちあっていくこと）を、親の願いも含めながらの具体的な方向含む策をみんなで出し合いたい。みんなで悩みながらの議論は、必ずその学校に同僚性が芽生え教育力アップになっていくと実感した。

根室レポートのA男には、高校を卒業した後、何もしていない姉がいる。A男との今後の関わりを模索していく時、学校という枠組みだけでの視点からではなく、姉・家族の

実情含めての支援が必要ではないか。A男の成長発達のプロセス含めての、必要な地域支援が問われてもいるようにも思えた。

六 「うんこ」と排便の指導

日高連絡会 ○○小学校 K○

今日も会いたい、いとしのウンコ。K○さんの願い。それは、「自分のからだだと日常的に対話する意識」。子どもたち一人ひとりが、自分のからだの主人公として自分のからだを慈しみながら、体感覚と知識を生かして生活を創ることで、生涯を健康に過ごす土台をつくって欲しい。

うんこや排便を取り扱うことは、それが生きるからだの営みの基本であり、中でも、最もリアルなウンコに着目させることで睡眠や食生活、運動など生活全般を問い直す視点になると仮設する。

健康生活がんばり表という5日間の調査を実施する。その間保健室からは、ウンコ知識の情報と調査の結果やアンケートからの課題等が発信される。K○さんは、町の図書館からウンコに関する30冊の絵本を借りてきた。ウンコの本に埋まりながら読み聞かせも行った。ゾウやウサギのウンコも写真で登場。9月は、まさに「ウンコワールド」が

子どもたちを引き寄せる。

意識を高めて自己管理を、と願うK○さんならではの、教材に思いをたくす、このせまり方と興味の継続性と保護者を巻き込む取り組みは、計り知れないおもしろさとすこさが潜んでる。

体にこだわり続けることは、自分って大事・フシギも含めての、一人ひとりの根底にある自己肯定感へしっかりと光をあてること。関連の保健だよりから、調査を一般化していくことの幅の広さとその奥行きを学びたい。

取り組みを通して、学校のトイレへの要求が出された。参加者が子どもの権利条約を意識したに違いない。

ウンコを学ぶ機会のない子どもたち。ウンコをマイナスイメージに見る子どもたちは、実は生きていることの意味を知りたい子どもたちである。昨今の、排便がスムーズでない子どもの数の多さを、さまざまな角度から見つめ直す必要性をも提示してくれた貴重な報告でもあった。

七 保健学習と保健指導をつなげて

檜山教組 ○○小学校 ○○

このレポートの価値は、保健学習の教科書の不十分さの指摘に留まらずその活用を含めて、子どもにあった自主編

成とその実践的な検証、その手ごたえも含めたところだ。

東京書籍版・新しい保健のウリをホームページで確認しながら、この教科書で子どもに必要な知識を定着させることができるのだろうか、子どもたちに「気をつけよう」というだけでいいのか、知識詰め込み方から考える授業へ

転換させることができるか等々、さまざまな観点からの見直しの中で、子どもが子ども期において納得できる自主的教材を使つての学びをつくる。

長年この分科会に参加させて頂いているが、教科書を直視することをスタートにした報告は初めてである。その新たな分野への挑戦に敬意を表したい。

保健という分野を社会の有り様から見ていくときに、日本が抱えている貧弱な公衆衛生の歴史や、地球規模で考えていかなければならない環境問題が見えてくる。

〇〇さんの「保健が好き」という日頃の学びの蓄積が、「楽しい・わかる・行動化に結びつく」保健指導の視点からの保健学習を創り上げている。

子どもをみんなで育てていくという観点から、保健は欠かせない。体に着目した時に、授業が生まれたものとなった。

〇〇さんの表現する「保健力」。妙にみんなで納得をした。それは保健力をつけるための教材選択と教材に託す思いが、参加者の心に深くしみ入ったからだ。フィリピンの

ごみ問題や原発事故等のリアルな写真に訴えかけられた参加者。〇〇さんの、子どもの視野を広げ、新しい視点での地球規模での自分の存在を見つめていくスケールの大きさからだ。

やがて共に歩む人として子どもたちを見つめ、養護教諭として今やれることを教科書から見つけ出したことは、特に小規模校の養護教諭たちへ、保健という未知の分野への開拓の呼びかけにも聞こえた。まずは、教科書とその指導書を読もうという参加者の声が、開拓者として共に学ぶつなりの表明にも聞こえた。

八 子どもの心と体の成長 ∴父母と共に見守つて∴

檜山教組 ○〇小学校 S〇

一次産業で生計を立てる地域の貧困度は厳しいはずだ。欠損家庭が4割以上にもなる学校なのに、こんなにも温かて安心して生きることのできる学校がある。

その学校の底辺をつくるS〇さんは、存在している子どもたちの背景含めて、一人ひとりを底辺から見つめ、生きることがステキなんだとおおらかに唱える。だから保護者に、忙しいけれど子育てを楽しんで、というメッセージも送り続ける。

集団の中での1人としての子どもの、ほんの少しの成長の変化を見逃さない。それを具体的に保護者に伝えることを基本とした健康手帳の活用を通し、S○さんのあたたかな眼差しが、教師含めて保護者の目の質を高めていく。その目はみんなで子どもを見ようとする意識のある学校にしてい

ていく。
S○さんは厳しい辛い社会の中で懸命に生きる保護者たちを知っている。子育てにおいて子どもに必要な経験が貧しいのであれば、その経験に値することを学校が提供できるのではないか。スキーが苦手の子、プールに替える子を受け入れながら、学校の一員として、養護教諭としてできることを、優しさで包みながらすすめていく。最も弱者に関わることができることは、肯定的に子どもの育ちに目を向けることができること。

心に残る待ちの時間をつくった学芸会でのエピソードが語られた。合奏の始まる時、ある子のピアノ力が壊れた。その子はそれを指揮者に伝えた。別な物と取り替えるのに少しの間待たなければならぬ。その時、体育館にいる全ての人たちでつくりあげた温かな閑静な時間。改めて合奏が始まった。

待ちの時間は、数分かも知れないが、その中に含まれている人間的価値の大きさが、教育は共同の力で創り上げて

いくことをS○さんは体感した。この学校にとつては、学芸会の成功というよりも教育の成功に違いない。

おわりに

今回初めて全体会を実施せず、最初から分散会でスタートした。養護教諭のレポート数が7本あり、討議を深めていくためには、一定の時間の確保が必要と考えたからだ。しかし、もしレポートを事前に見ることができていたならば、今まで通りの全体会で共通レポート討議をしていただろう。

檜山○○さんの「保健学習と保健指導をつなげて」は、この分科会ならではの、体育教師と養護教諭との今までにない実践的な議論がされたのではないかと悔やんでいる。

○○さんのレポートを十分な配慮なしに取り扱ったことを謝罪したい。併せて、以前のようにレポートが事前に頂けたのであれば、配慮できたことのようにも思っている。

合研の中でも珍しい、保健・体育で合体された分科会の良さを重んじると共に、充実したスムーズな運営に欠かさないレポートの取り扱いに検討の余地があるように感じた。分科会終了時点での参加者の声から、この場での出会いを機会に互いに連絡を取り合い、日々の実践のために具体

的な事柄を出し合えるようなつながりが生まれそうな予感がした。今回の合研、「希望」と「つながり」を真摯に受け止め合う参加者に感謝したい。